

ホームネットワーク元年を迎えた情報家電

情報家電の世界は、AV機器のデジタル化、ハードソフトの急速な進化、取り巻く通信環境、コンテンツサービスなどの急激な変革によって、新時代に突入しようとしている。

まず第一に薄型TV、DVDなどのデジタル家電が本格的な普及期を迎える。薄型TVでは40インチ以上はプラズマ優位とされている分野に、液晶テレビも拡大を図っており、両陣営とも品質、価格の面で厳しい戦いが続いている。また、次世代DVDもいよいよ市場に出現する。結局2つの規格が併存することになった次世代DVDであるが、東芝やNECが主導する「HD-DVD」陣営と、松下やソニーなどの「ブルーレイ・ディスク」陣営ともに今年は本格生産に入る。ブルーレイ陣営は記憶容量が25ギガバイトとHD-DVDの15ギガバイトに比較して大容量であり、米ハリウッドの映画会社の支持を受けて強気であるが、HD-DVD陣営も米マイクロソフトとインテルの支持を受けてパソコンと専用プレーヤーにDVDを組み込むことにしており、規格の争いは当分続くことになる。

これらデジタル家電はわが国の得意とするところであるが、2つの方式や規格が併存し、競争が過熱化する結果、価格下落が続き、コスト削減がそれに追いつかないために、売れても赤字になるという、いわば豊作貧乏のような結果を引き起こしている。各メーカーとも営業体制の効率化や販売チャネルの見直しなどを行っているが、流通部

門も自社で持っている自動車メーカーなどと違って、資本系統も全く違う量販店に販売を委ねざるを得ない市場構造ではなかなか難しい。

次に情報家電のネットワーク化により、家庭内の情報家電相互に自由にコンテンツをやりとりするホームネットワーク時代が黎明期に入ったとすることができる。ホームネットワーク化が進めば、生活上のさまざまな課題に対して具体的な解決をもたらし、生活をいっそう快適で豊かにすることができる。しかし、これを実現するには、各家電メーカーのさまざまな家電製品が自由に接続できる状況が必要である。この課題を解決するために、PC、家電、通信機器の連動を目指したグローバルな標準化団体「DLNA（デジタル・リビング・ネットワーク・アライアンス）」の活動が活発化してきた。DLNAは2003年に発足し、家電メーカー、PCメーカーなど272社が参加し、音楽、動画、写真などデジタルデータを家庭内のパソコン、テレビ、コンポなどで自由に送受信する仕組みを策定している。また、高速電灯線通信（HD-PLC）による接続技術も実用化の段階に入っている。

HD-PLCはコンセントをケーブルに差し込むだけで毎秒200メガバイトのデータを高速伝送できる。なお、白物家電のネット接続規格標準化団体の「エコネット・コンソーシアム」は昨年白物家電とデジタル家電をつなげる規格を決定し、対応製品も発売されてきて

いるが、普及しているとは言い難い。いずれにせよ、機器の種別や製造メーカーの違いを意識せずに、データのやり取りができる環境の実現によって、いつでも、どこでもというユビキタス社会が実現する。

今年は、ホームネットワーク時代の主役がテレビかパソコンかという主導権争いが本格化する年でもある。本年1月5日～8日まで開催された、米ラスベガスでの2006 CES（国際家電ショー）では、マイクロソフトのビル・ゲイツ会長が基調講演を行い、インテルが開発した、次世代のデジタル・エンターテイメント・プラットフォーム「インテルViiiv（ヴィーブ）テクノロジー」と、年内に発売予定の新OS「ウィンドウズビスタ」を組み合わせ、家庭内のデジタルAV機器との連動が、面倒な設定なしに行える機能などを紹介した。

2006年の国内需要は、薄型テレビが約650万台、DVDレコーダーが約640万台、パソコンが約1,300万台と見込まれている。家電の牙城を死守したいわが国家電メーカー、リビングの市場に拡大したい国内パソコンメーカー、そして日本の家電市場を開拓したいインテルの3グループがしのぎを削って、激しい市場争奪戦が開始される。

以上のように、今年はホームネットワーク元年とも言える年である。わが国メーカーが国内に留まらず、世界のなかでホームネットワークの主導権を確保することを期待したい。